

平成20年度購入文化財一覧

【奈良国立博物館】(計7件)

<p>1</p> <p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><絵画> 聖徳太子及び道慈律師像 (しょうとくたいしおよびどうじりっしぞう) 2幅 室町時代 14~15世紀 絹本着色 聖徳太子像 縦119.5cm 横49.2cm 上部26.5cmが補絹 道慈律師像 縦119.2cm 横49.2cm 上部26.6cm、下部9.1cmが補絹 聖徳太子像は、法隆寺で「水鏡御影」と称される形式の像である。この形式の遺品は鎌倉時代後期以降の作があり、本品は比較的古い例である。鎌倉後期の作と見られる法隆寺本などとほぼ同形であるが、衣の輪郭などに若干簡略化したところも見受けられる。面相部が剥落のため薄れているのが惜しまれるものの、水鏡御影の古様を伝える作品としては重要である。一方、道慈律師像は、個性的な相貌を描き、説法の相と思われる開いた口は古様の祖師像にま見られる形式であることから、依拠する古図があったとも思われる。表現はやや形式化に傾く点も認められるが正統的であり、他に知られた例のない道慈像として貴重な作品である。 10,000,000円</p>	<p>聖徳太子像</p>  <p>道慈律師像</p> 
<p>2</p> <p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><書跡> 額安寺大塔供養願文 (がくあんじだいとうくようがんもん) 1巻 鎌倉時代 14世紀 彩牋 墨書 縦41.0cm 長391.5cm 本品は、額安寺五重塔の落慶供養にあたり作成された願文である。通常より大きめの料紙を六紙継ぎ、金銀の切箔で装飾したうえに、墨で文字を記す。紙背には、同じく金銀箔を用い、表面とは趣の異なる装飾が施され、額安寺の主要堂塔の造営過程を詳細に記す貴重な史料である。 9,000,000円</p>	

<p>3</p>	<p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要</p> <p>○購入金額</p>	<p><書跡> 紺紙金銀交書 大方広如来不思議境界經 (こんしきんぎんこうしょだいほうこうによらいふしぎきょうがいきょう)</p> <p>1 巻 平安時代 12 世紀 紺紙金銀交書 縦 25.8 cm 全長 528.8 cm (本紙 508.2 cm 見返し 20.6 cm) 本品は、藤原清衡(1056~1128)が発願し、中尊寺に奉納した紺紙金銀交書の一切経である「中尊寺経」の一巻と考えられる。紺紙に銀泥で界線を施し、金泥と銀泥を用いて交互に経文を書写しており、表紙には金泥と銀泥で宝相華唐草文を、見返しには金泥と銀泥で釈迦説法図を描いているのが特徴である。また本品は、平安後期を代表する写経であり、かつ奥州藤原氏の栄華を今に伝える名品である。</p> <p>10,000,000 円</p>	
<p>4</p>	<p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要</p> <p>○購入金額</p>	<p><書跡> 蘇磨呼童子請問經 巻下 (そまこどうじしょうもんぎょう)</p> <p>1 巻 平安時代 12 世紀 紙本墨書 縦 26.9 cm 全長 1016.2 cm (本紙 992.9 cm 見返し 23.3 cm) 本品は『蘇婆呼童子請問經』ともいい、上下二巻からなり、真言行者必読の書とされている。本品の文字は、平安から鎌倉にかけての書風で、院政期末期にあたる 12 世紀後半に書写されたものと考えられる。また全巻にわたり、朱でヲコト点・返点・句切点・連続府などの訓点や仮名・注記などの校合もみられる。料紙が上質で、かつ筆跡も優れており訓点資料としても貴重な優品である。</p> <p>2,000,000 円</p>	

5	<p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><書跡> 額安寺文書 (がくあんじもんじょ)</p> <p>5巻 うち ①別当職相伝関係文書 6通 ②延慶三年(1310)慈信金岡東庄寄進状 1通 ③金岡東庄所領安堵関係文書 3通 ④元亨三年(1323)金岡東庄下地中分関係文書 6通 ⑤金岡東庄相論関係文書 15通</p> <p>鎌倉時代～南北朝時代 13～14世紀 紙本墨書 ①縦 25.5～27.7 cm (総 30.3 cm) 長 425.5 cm ②縦 27.0 cm (総 30.3 cm) 長 182.5 cm ③縦 26.8～27.5 cm (総 33.2 cm) 長 205.8 cm ④縦 30.8 cm 長 419.4 cm ⑤縦 30.3 cm 長 677.3 cm</p> <p>本品は、五巻のうち、①には別当職の譲状や別当職相伝の関係系図など、②～⑤には額安寺領備前国金岡東庄に関わる文書が収められている。当文書群は、額安寺領荘園の経営過程について具体的に示していることから、中世額安寺の様相を知る上で重要な史料であるといえる。</p> <p>12,000,000円</p>	    
---	---	---	--

6	<p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><彫刻> 木造南無仏太子立像 (もくぞうなむぶつたいしりゅうぞう) 1 軀 鎌倉時代 13~14 世紀 針葉樹材(ヒノキか) 一木割矧造か 内割 彩色 玉眼 像高 68.0 cm 頂一顎 17.2 cm 面幅 10.1 cm 耳張 12.8 cm 面奥 13.3 cm 胸奥(左)14.0 cm 胸奥(右)14.0 cm 臂張 22.4 cm 腹奥 15.1 cm 裾最大張 37.7 cm 『聖徳太子絵伝』に記される、聖徳太子が二歳の春に東を向いて合掌し「南無仏」と称えたという説話上の姿を表した像。制作年は、降っても 14 世紀冒頭の 10 年、あるいは 13 世紀の最末までさかのぼる可能性が考えられる。作者については、これも明証を欠くものの、利発さを強く感じさせるその明快な表情は、沈鬱な表情に陥ることの多い鎌倉時代末期の南無仏太子像とは一線を画しており、康俊作のMOA美術館像や作者不明ながら南都に伝来した奈良・元興寺像、あるいは湛幸作の兵庫・善福寺像などに通じ、慶派の系列に属する仏師の手になるものかと推測される。しなやかさのある着衣の襷の表現もこの推測を補強するものといえよう。 40,000,000 円</p>	
7	<p>○種別 ○名称 ○員数 ○時代 ○品質 ○寸法等 ○作品概要 ○購入金額</p>	<p><金工> 金銅独鈷杵 (こんどうとっこしよ) 1 口 鎌倉時代 13 世紀 銅製 鑄造 鍍金 長 15.4 cm 径(鬼目部)1.8 cm 本品の特徴は、縦長鬼目と内側に蓮弁を作らない蓮弁帯の表現にある。当形式の蓮弁帯は、きわめて珍しいものであり、そのため本品の形式を「額安寺形」と称することもある。製作時期については、鬼目が大きく隆起が高い点や蓮弁帯が素弁で簡潔な表現をみせていることから、鎌倉時代に推定することができる。また、本品は忍性(1217~1303)所持の伝承がある。 7,000,000 円</p>	

以上